

中

学校の同級生と二年ぶりに飲んだ。土曜日の居酒屋で客が我々三人だけというのこの状況下ではさして珍しくもないだろう。店主の苦勞も並大抵ではなからうと表情を見るが、腹をくくっているのか淡々としたものだった。

「それで、今何しちよう？」

おいでなすった。誰彼から問われるに違いないと思定していた問答集のナンバーワンが乾杯もせぬうちにいきなりだ。当然回答を用意しているのだが、問われ方のバリエーションが様々なのでどう答えたものか迷ってしまう。

「ん、何もしてないけど。」

待て、これは回答例になかったはずだが。なぜこれを答えている？自問自答している間に、同級生はびつくりしてしまっている。

「マジか…。」

羨望などかけられない。よく平気でいられるな、と不思議に思っている。いや、お前が思うほど何もしていないわけではない、と言いつくろいたい気持ちに襲われる。

「オヤジが死んじゃったし、かたづけしたり…。あつ、それに毎日料理しちよう。」

いまいましい。つまらぬことを並べてしまった。何

もしていない、それでパーフェクトだったのに。

黒板を前にするか背にするかの違いはあるにせよ、半世紀以上学校に通い続けたのだ。退職とは、学校に通わなくてよいということだ。これは自分にとって大きなことだから、一月や二月などとケチなことを言わず、三年でも四年でも通わないでみよう。何をするかは、それに比べればたいした関心事ではないのだ。

デルタ株の感染力は、子どもも大人も変わらないとニュースが言う。テレビには二期の始業を前に対応に苦慮する学校が映り、消毒液を手にした教頭がインタビューに答えている。

「大変だな、学校も…。」

つぶやいたら、妻が言った。

「いいのかな、このままで。三月まで大変だった人が、何もしないで。」

まづいのじゃないかという妄念が妻のアシストで浮かんできるとのやり過ぎ。

「何もしないで平気だったら最強だろう。」

「そりやそうだけ…。」

「今何しちよう」「息しちよう」、幼い頃飽かず繰り返した対話がふと浮かんできた。人を食っていないながら、開き直っているようでもあり。これを怒る無粋は御法度だ。なかなか奥深い。今度使ってみよう。



專業ババ奮闘記 (その2) 64

木幡智恵美

コロナ禍の中で (3)

「おはようございます」の甲高い声。実歩だ。土曜日、孫たちのためにと朝から昼食やデザート作りをしている私の動きは鈍い。夜中、歯痛に襲われ、バファリンを飲んで朝方少しは眠ったようだが完全に睡眠不足。義母をデイスサービスに送り出し、歯科に予約を入れたところだった。

予約の時刻まで、寛大、実歩、夫も誘ってトランプをする。実歩はトランプをし出してから数字が読めるようになり、目下ババ抜きが大のお気に入りだ。神経衰弱をやると、ジジもババも寛大に敵わない。四人でトランプをしている傍、母親のひざ元で、宗矢はたまに寝返りをうつ。もうすぐ生後五箇月、離乳食も始めている。

予約時刻の十五分前に家を出、歯科医院に入った。アクリルマスクをつけた受付の方に検温され、「手洗いと消毒をしてください」と言われる。手を洗い、消毒薬をつけ、再び受付に行くと、問診票と、コロナに関する調査項目が書かれた紙を渡された。二週間以内に県外の人と接触があったかどうかなど。待合室に椅子は四脚のみで、奥側にマスクをつけた人が座ってスマホをいじっている。待ち時間には新聞や雑誌を手取るのだが、「コロナ対策のため、置いていません」と張り紙がしてあり、何もない。私はスマホも持っていないし、ただぼうつとして、呼ばれるのを待っていた。ようやく診察室に呼ばれ、痛い箇所を示す。歯科衛生士さんが、歯と歯ぐきの間にとがったものを突っ込んで三とか四とか言われる。レントゲンを撮られた後、歯科医師の診察。歯周病の一手前だということ、夜中に痛んだ箇所は、歯ぐきから入った菌のせいで炎症をおこしていることを告げられた。歯ぐきに薬を詰められ、抗生剤と痛み止めをもらった。次回は歯磨き指導だそうだ。

帰って皆に昼食を食べさせ、実歩はバズル、寛大はブロックで少しだけ遊び、ジジ以外は横になる。実歩は本を読んでやった後、二つ目のお話をしているうちに眠った。寛大は眠れないと言うので、眠っている三人を居間に残し、二階に上がってデイズニーの音楽を聴く。子どもたちは日に日に成長し、私はできないこと、痛いところが増えていく。義母も、どんどん手がかるようになってきている。

30代フリーター やあ、ジイさん。小田急線車内での無差別刺傷事件の容疑者は「勝ち組の女性を殺したかった」と供述していると報じられている。年金生活者 そうした願望とそれを実行に移すこととのあいだには大きな隔たりがある。その隔たりを埋めたものは何か。それを語らない限り、犯行動機を説明したことにはならない。

13年前の秋葉原の無差別殺傷事件をめぐって、当時、物書きたちは一様に「承認欲求」を犯行動機としてあげた。「承認欲求」を持つことと無差別殺人を実行することとのあいだには大きな隔たりがあるのに、彼らはその隔たりを埋めるものについて説明することはなかった。

30代 何が隔たりを埋めたんだ。年金 人間は死を生否定としてとらえる。言葉という、否定の機能を備えたものを持つてしまったからだ。生きることとは絶えず特定の場所と特定の時間を占めることであり、その意味で徹底して個別的な営みだ。それを否定す

る死は個性を脱して普遍性に移行することを意味する。

人を殺すことは普遍性を生み出すことであり、殺される側の普遍性よりも大きな普遍性を獲得することだ。殺す相手が不特定多数に及べば、普遍性の度合いはさらに増す。無差別殺人を実行した者はその普遍性を手にしたくて犯行に及んだという想定が成り立つ。

30代 人を殺す理由にしては抽象的過ぎる。年金 「普遍的」は英語で「ユニバーサル」だ。「ユニバーサル」には「宇宙的」という意味がある。死が生否定であり、したがって生の「個別性」を脱することだとすれば、死とは「普遍性」に移行すること、言い換えれば「宇宙的」になること、つまり宇宙と一体化することを意味する。

人間は生涯の最初期にそれを経験する。胎児の時代だ。胎児にとつては母胎が全宇宙であり、胎児は臍の緒を介してそれと一体化している。万能感と快感を与えてくれる楽園

向えば自殺の、他者に向えば殺人の企てとなる。

30代 快感原則よりはるかに短い時間で「小宇宙」を変化させる刺激とは何を指しているんだ。

年金 吉本隆明はかつてないような凶悪事件が起る背景に人びとの「いらいら」があると語った。そしてそれは

だったその宇宙を追われ、この世界の荒れ野に放り出された人間は、生涯にわたって母胎の宇宙への帰還を求め続ける。無差別殺人者はその願望がだれにも増して強い者たちのひとりと考えることができる。

30代 そんなことで人を殺すか。年金 胎児は母胎を離れてこの世界に生まれ落ちるとき、母胎の代わりとなる心的な構造をおのれの内部に形成する。動物が「宇宙の一部を切り取っておのれの体内に封じ込め」（三木成夫『胎児の世界』）るように。母胎が「大宇宙」だとすれば、それは「小宇宙」だ。「植物のからだだが、太陽を心臓にして、天地をめぐる巨大な循環路の末梢毛細管に譬えられる」（同）のとは対照的に、動物は体壁の内側にも宇宙を持つ。胎児から乳児への転換は植物から動物への転換としてとらえることができる。

「小宇宙」は万能感と快感を与えてくれた「大宇宙」のいわばレプリカであり、失われた「大宇宙」へ帰ろうと産業の循環の速度と日常の速度とのずれから生じる、と。前者は快感原則よりもはるかに早い速度を持つていることに私たちは気づくはずだ。

30代 小田急線の事件の容疑者は「ナインパー」を自称していたことがあるという報道がある。女性にモテるかどうかを人生の重大問題と考えていたように見える。

年金 モテることに過剰にこだわる振る舞いは失われた母を求める行為と考えることができる。幼くして母を亡くした光源氏が母の代わりを求めて女性を次々と口説き続けたように。母を失う経験は死別とは限らない。授乳や排泄の世話がしよつちゅう途切れたとか、そばにいる時間がとても少なかったとか、といった経験が含まれる。

小田急事件の容疑者もその種の経験をして、女性にモテたいと切望し、それが思い通りに行かず、女性に恨みを持つようになったという推測は確かに成り立つ。だが、それが犯行の引き金を引いたと考えることはできない。

する無謀な企てを阻む役割を担っている。宇宙である以上、それは絶えず動いており、その動きを通して平衡を保っている。興奮や緊張によって不均衡が生じると、それを打ち消して平衡を取り戻そうとする。フロイトはそれを快感原則と名づけた。

快感原則には固有の時間がある。興奮、緊張が生じてからそれが解消されるまでの時間だ。その長さは興奮、緊張の度合いによって異なるとしても、一定の範囲内に収まるはずだ。もし、それよりはるかに短い時間で「小宇宙」を変化させる刺激が外部から与えられれば、快感原則はそれに対応できず、「小宇宙」は存立の危機に遭遇する。そこから脱しようとして一気に「大宇宙」に帰ろうとする衝動が生まれる。

だが、それはかなわないことであり、代わりに選ばれることのひとつが死だ。死は究極の平衡状態だ。死を生誕の逆過程と考えれば、それは母胎という「大宇宙」への帰還を代替するものともなる。この死への衝動が自分に

ニュース日記 796
中村 礼治

なにが無差別殺人の引き金を引くのか